

使徒言行録19章 1節-20節

『彼らの上に手を置く』

今日の聖書箇所は、パウロがエフェソの町で伝道活動する中で出会ったこと、起こったことが報告されています。

少し箇条書きふうには、まず最初に、エフェソの町でパウロが会うのが、「何人かの弟子」たちでした。使徒言行録で弟子と言え、それはキリストの弟子という意味なのですが、そして事実この人たちはキリストの弟子であると自称していたのですが、実態はそうではなかった。これは先週読んだアポロとほぼ同じケースです。キリストのことを知らないキリストの弟子。

パウロたちは、この人たちにイエス・キリストの福音を語り、イエス・キリストへとつながる洗礼を授け、彼らの上に手を置き、祝福して、遣わしていきました。

次にパウロが遭遇したのは、福音をかたくに信じようとしない人々でした。パウロはエフェソの町で三カ月にわたって神の国について大胆に論じた。イエス・キリストによる神の国のおとずれを力強く宣べ伝えた。しかしかたくで信じようとはせず、逆にキリストの福音を非難する者たちがいた、と報告されています。どんな町であっても、福音が語られたら、すべての人が福音を信じるようになるわけではない。神の言葉が語られるのだから、すべての人が信じる、ということがあってもおかしくはないと思う人がいるかもしれませんが、信じる者が生まれるのと同時に、信じない者も生まれる。たまたまそうなるというのではない。福音そのものが信じるものと信じない者を引き起こしていくのです。福音というのは、イエス・キリストの十字架と復活がわたしたちの救いであるという知らせです。すなわち、人は自分の力や頑張りで救われるのではない、ということです。自分が神ではなく、神に聞き従う僕であることを知って、神に従う歩みへと向かう、という人間にとって根本的な在り方の転換が起こっていく、それが福音です。神に従って生きるのですから。そこで、従うことはいやだ、ということもはっきりしてくるのです。かたくに信じようとしない、そういう生き方も福音の前で当然起こってくるのです。パウロはその現実にも向き合う。福音を語るものにとってそれは避けられない。パウロは信じない人たちにさらに説得を試みる、というようなことはしていない。拘泥しない。さっさとその場を離れ、別の場所で福音を宣べ伝える。福音が信じるも

のと信じない者を引き起こしている以上、人間の力でそれを説得するなんてことはできないのです。大事なことは語り続けることなのです。

それから祈禱師たちのことが出てきます。この人たちは遍歴する魔術師、呪術師と言っている人たちです。祈禱や魔術で悪霊にとりつかれた人の悪霊を追いだそうとする人たちでした。彼らは悪霊にとりつかれている人たちに向かって、パウロとイエスの名を利用して、あたかも自分たちにその力が宿っているかのごとく、悪霊を追い出そうとした。ところが、この祈禱師が追い出そうとしている悪霊自らが「イエスのことも、パウロのこともよく知っている。だが、お前はいったい何者だ。」そう言って祈禱師に反撃するのです。これはとても示唆深い話です。

祈禱師、魔術師、呪術師、この人たちは自分たちの祈りや魔術や呪いで、悪霊を追い出せると思っていた人たちです。祈禱で、神を動かし、自分の要求で神を引き出し、自分の願うような形で神の力を利用する、そう思い定めていたのが祈禱師です。しかし、そもそも人間の都合で神の力を自分勝手に引き出せるものなのか。

この祈禱師の登場の前に、パウロの手になる奇跡が報告されていますが、その奇跡の主語はパウロではなく神です。パウロはイエス・キリストに聞き従う僕です。その中で神によって用いられた、ということです。

ここで、祈禱師、魔術師とパウロとがコントラストをなしています。神を自分の力で自分の思うように引き寄せようとする人と、神に従う中で、土の器として神によって用いられようとする人と。極論すると、わたしたちも、祈禱師のような信仰を振りかざしてしまうことがしばしばあるのではないか。神を自分の都合に引き寄せるような祈りをして、神に従うことを放念していることも少なくないのではないか。

祈禱師の悪霊払い、悪霊によって攻撃を受けることになりました。悪霊の力は人間の力より大きい。人間の力を超えている。だから人間では追い出せないのです。祈禱師たち、魔術師たちは悪霊の反撃を受けて、傷つけられて、逃げ出したのです。

この出来事は人々の知るところとなり、主イエスの名前があがめられるようになったということです。魔術をおこなっていた人々も魔術の本をもってきてみんなの前で焼き捨てました。そして主イエスの言葉がますます広がっていったのです。

悪霊の力や働きについては、これまでもいろいろな形で話してきました。悪霊の力は神から人間を切り離すことに向かっていきます。そして人間を神から切り離すことで、非人間的なものをしようとします。しかし非人間的と言ってもそれは実際にはとても分かりにくいものです。

ある小説の中にあった話なのですが、主人公には妻がいて、二人で暮らしていたのですが、妻の不倫がわかって二人は別れることになった。彼は自分の方から家を出て、会社も辞めて、新しい仕事を始める。離婚が正式に決まった時、妻は夫に謝らなくてはならない、という。「何について」「あなたを傷つけてしまったことについて」と妻は言う。「傷ついたんでしょう、少しくらいは。」すると夫は「そうだな、僕も人間だから、傷つくことは傷つく、少しかたくさんか、程度まではわからないけど」そう彼は応える。それからいろいろなことがあるなかで、彼はあることに気づいていくのです。それは妻に対して言った言葉「傷つくことは傷つく」にずっと引っかかかっていて、こう思う。「でもそれは本当ではない。少なくとも半分は嘘だ。俺は傷つくべき時に十分に傷つかなかったんだ」ということを彼は認めるようになる。

それはどういうことかと言えば、わたしたちは誰でも、生きる中で傷を負っていきます。傷つくとき、傷つく場所、傷つく関係がある。小さな子どもの時、親子関係や、友人関係の中で、思春期になってから。そして大人になってから。夫婦関係の中で、職場で。だが、傷つくことの傷の深さを恐れて、傷つく前に自分の殻を創ってその中に閉じこもってしまうこともあります。自分をコーティングして、傷を負わない自分であろうとしてしまう。感覚を殺してしまう。大したことなんかない、というふうにふるまって。そして傷など負っていないかのように思いこませていく。しかもそのことに自分自身が気づかない。例えば、本当は自分は友人から愛されてこなかったのではないか、とか、自分も友人をころからうけいれ愛そうとしなかったのではないか、愛されなかったという傷もあるのですが、愛してこなかったという傷もある。小説の主人公は妻の不倫や、妻と別れるということによってどれほど深くダメージを受けることなのか、そのダメージを受けるということに正面から向き合ってこなかったことに気づくのです。人としての真実と向き合うことは、つらいことも、いたいことも、苦しいこともある。だがそれを回避して、結果虚ろな心を抱えてしまう。

悪霊の働きは、その人を真実と直面させない、ということでもあるのです。悪霊はその人がその人として、痛んだり苦しんだり、傷ついたりすることを本当の意味で奪っていく。非人間化する。キリストの十字架は人間にとって避けて通ることのできない、苦しみ、痛み、傷を負っていく、ということでした。

それはわたし自身の負うべき苦しみであったのに。わたしたちはキリストの十字架の恵みを知る中で、自分の傷や痛み、罪に気づかされていくのだとすれば、イエス・キリストと出会うことの中でこそわたしたちは悪霊の働きから解放されていく。

パウロのエフェソでの歩みを今日の聖書箇所は報告しています。その出来事はあたりまえですが、バラバラの出来事と言えはいいことです。キリストを知らない自称キリストの弟子たちのこと、福音を語る中で、信じない者たちがいたこと。祈禱師たちのこと。悪霊の働き。それぞれ別の事柄です。しかし大事なことがあります。それは、その出来事の中で、イエス・キリストの福音に聞いて生きているパウロがいるということです。起こってくる出来事の中で、福音に聞いて、福音において応待しようとするパウロがいるということです。それぞれの出来事に対する応答は皆違う。違わざるを得ない。しかしパウロは福音に聞き、生かされ、一つ一つのことに向かう。というか福音にしか頼らず、福音によってしか出来事と向き合っていない。キリストを知らないキリストの弟子たちに対して、ていねいに福音を語り、手を置いて祝福し、送り出す。エフェソの会堂で三カ月にわたって福音を大胆に宣べ伝え、信じない者たちが出てきたことに対しては、彼はその事実を受けとめて、退いていく。そして別の場所で福音を宣べ伝える。祈禱師の出会いでは、パウロは何もしていない、と言えは何もしていない。しかしこの事件もパウロがイエス・キリストの福音を宣べ伝える中で起こってきたことです。そして魔術の本を焼き捨てる人たちがでてきたというのです。魔術ではなく、イエス・キリストによって悪霊を追い出していただく以外にはない、ということを知らされた人たちが出てきたということです。現実には様々な問題や、出来事を起こってきて、わたしたちを右往左往させる。だが、わたしたちの拠るべきものは、いつどんな時もイエス・キリストの福音なのだ、ということを中心と体とで受けとめていきましょう。